

明和児童クラブだより

第2号
2019年5月30日発行
(文責) 鷲頭

ショッキングな事件が続く中で

大津市の事件、そして川崎市の事件と、幼い子どもの命が突然失われるといった痛ましくショッキングな事件が続いてしまいました。そんな中で改めて思い及ぶのは命の大切さです。明和児童クラブでも、全職員で、再度様々な観点から、児童の安全について再確認していこうと考えています。

児童が児童クラブにいるときに緊急事態が発生した場合は

各学校では、1学期に「緊急時の引き渡し訓練」をすでに実施したり、これから実施する予定の学校もあるようです。大きな地震が発生したり、周辺に凶悪な不審者が出没したりといったときなど、児童だけでは下校させられないような事態を想定しての訓練です。

児童クラブ保護者の方から、明和児童クラブに児童がいるときにそのような緊急事態が発生したらどうするのですかというお尋ねがありました。

明和児童クラブでは、そのような場合でも、**通常と同様に、保護者の方がお迎えに来ない限り、児童を帰すことはありません。緊急時においても保護者の皆様がお迎えに来られるまで、どんなに遅くなっても児童の安全を確保しながら保育をしています**ので、ご安心ください。

なお、混乱を避けるために、児童クラブから各家庭への個別の連絡は現時点ではしない方針です。しかし、各家庭への連絡方法については、今後、さらに検討していく予定です。

また、緊急時の避難訓練については、昨年度の1月に引き続き、6月中に実施する計画です。

今年度は、地震、火災、不審者を想定した避難訓練を年間を通して実施していく予定です。



明和幼稚園の夏祭りのチケットについて

すでにお取りいただいておりますが、幼稚園で7月13日(土)に実施される夏祭りの**チケットの事前購入の締め切りが、明日(5月31日)まで**となっております。まだ、提出していなくてご希望の方は、支援員にお渡しください。

保護者の皆様へのお願い

明和児童クラブでは、各学校(7校)の下校時刻に合わせて、4~5台の車を使って、支援員がお迎えに行っております。そのお迎えの配車計画は、遅くとも一週間前には、作成しておりますが、その根拠となるのが、皆様から提出していただいている各月の「明和児童クラブ利用予定表」です。一人の児童の出欠により配車計画が変わることも多々あります。また、出席予定の児童がいない場合は、次の学校へのお迎えに支障をきたすこともあります。

そんなわけで「**明和児童クラブ利用予定表**」は**できる限り期日まで**にご提出いただくとありがたいです。また、**予定が変わる場合には、必ずメールでご連絡**をお願いいたします。

「子育てのあれこれ」のコーナーについて 今年度も、「子育てに関すること」について、情報を提供しながら保護者の皆様方と、いっしょに考えさせていただききっかけになればと、設けさせていただいているコーナーです。

子育てについては、様々な学説や意見等があります。しかし、TV番組や講演会、書籍などでは、科学的な根拠に基づかない主観的な主張や、理論的な裏付けのない偏った主張なども最近をよく見聞きします。私自身は、子育てもほぼ終わりになるのですが、今までの職業がら、未だに子育てについては勉強中です。しかし、勉強をしていく中で、「もう少し早く、この子育ての情報を知っていたらよかったのに・・・」と思えることが多いのが現実です。

そこで、私とは違って、子育ての真っ最中である保護者の皆様方に、少しでも役に立つような情報を提供できたらと考え、このコーナーを設けている次第です。このコーナーでは、児童心理学や脳医学、精神医学等々、できる限り科学的な根拠に基づいた子育てに関する理論や考え方、事例等を、毎回という訳にはいきませんが、時々紹介させていただこうと思います。なお、以前のコーナーとの関連性に触れることがあるかも知れないので、コーナーのNO. は昨年度からの続き番号にしております。

(文責＝驚頭)

子育てのあれこれ No. 4

今回は、「子どもとの対話」について紹介させていただきます。

子どもたちが健全に成長していくためのいちばん土台になる部分が、情緒の安定であるということは、教育を研究している様々な学者の説でも共通しているところです。

その情緒の安定のために、いちばん必要なことが、身体接触（スキンシップ）と対話であると言われていています。そして、子どもの年齢が上がるにつれて、身体接触（スキンシップ）よりも対話の重要性が増してきます。そこで、「子どもとの対話で大切なこと」について、教育心理学等で言われていることをいくつか紹介させていただきたいと思います。

①感情の表出をしっかり受け入れ、明瞭な言葉で返すこと

・「嬉しかったんだね」「楽しかったんだね」「くやしかったんだね」「～してほしいんだね」などと、感情を受けとめて返してやることで、子どもは、自分のことに関心をもってもらっていると感じとります。気をつけなければならないのは、「話を聴くこと」で、「聞き入れること」とは、違うということです。「〇〇ちゃんも持っているからぼくも△△がほしい」と言う子に対して、「△△がほしいんだね。でも、お母さんは必要ないと思うんだよ」という対応でしつけになるのです。

②評価的な言葉はできるだけ避けること

・例えば、テストや通知表を見て、子どもにかける言葉は、「対話」ではなく、指導や説諭、場合によっては説教になってしまいます。それは、強い立場の者から弱い立場の者への言葉となるからです。また、よく、「ほめて育てる」と言いますが、「ほめ過ぎ」は、「親に話すのは、都合のよいこと(叱られないようなこと)だけ」と言った方向に陥ってしまう危険性を伴います。例えば「〇〇ができてえらかったね」という言葉は、「〇〇ができないとえらくない」ということを暗に伝えていることにもなるからです。

③日常的な対話は、友だちに話すように雑談で

・友だちと雑談するときには、指示、命令、要望、要求、指導などはほとんどないはずで、そのような雑談を日常的に繰り返すことで何でも話せる親子関係ができていくのであり、指示、命令、要望、要求、指導ばかりでは、子どもは成長するにつれ、親とは話したくなくなってしまいます。恥ずかしながら、私自身も大いに反省させられた点です。そして、ここぞと思う場面だけに限って、指導や説諭をすることで、その効果があるのだという説もあります。

④子どもにできるだけしゃべらせ、大人は聴き役にまわること

・①～③のように対話をしていると、子どもは自然に自分からしゃべるようになるので、できるだけ子どもにしゃべらせることが大切だそうです。そこで、大人がしゃべり過ぎてしまうと、子どもはしゃべらなくなってしまったり、大人の顔色を見て、大人が期待しているようなことしか言わなくなってしまったりするそうです。

*参考文献 「叱るが育てるもの」(高野清純)、「荒廃する親子関係」(黒川昭登)、「『心の基地』はおかあさん」(平井信義)、「『このひと言』で子どものやる気は育つ」(アドラー博士が教える『失敗に負けない子』に育てる本) (星一郎)、「ホッネの教育論」(橋爪俊明) 他

上の4点にしても、私自身もう少し早く知っていたらと悔やむことばかりです。そんな私ですが、子育てについて皆さんといっしょに悩むことはできますので、お気軽に声をかけていただけたらと思います。